

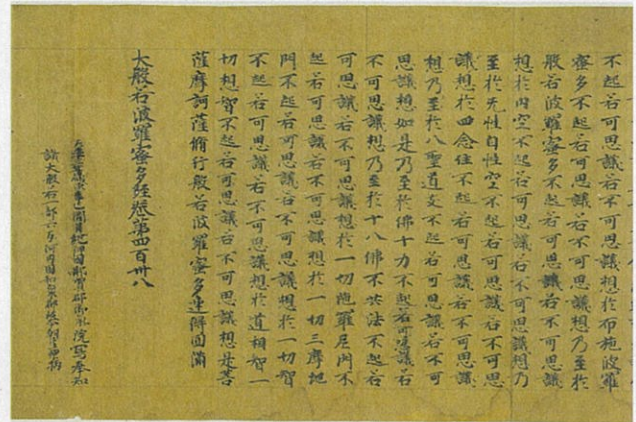
和歌山県立博物館 特別展「きのくにの大般若経」 展示のみどころ

大般若経（正式な名称は「大般若波羅蜜多経」）は、釈迦が4か所で16回行った説法の内容が書かれたお経で、中国・唐時代の三蔵法師玄奘が4年かけて翻訳しました。手書きの写本と、印刷された版本とに分かれますが、版本をセットで購入できるようになった江戸時代より前の時代には、巻1から巻600までを、1巻も欠けることなく、また重複せずに集めることは至難のことでした。そのため、写本と版本、また作られた時代や場所が異なる巻も寄せ集めて、何とか1セットに組み上げている場合がよくあります。それぞれの大般若経で、どのような経巻を集めているのか、その構成を知ることが必要です。

①きのくにで書かれた奈良時代のお経

現在は廃絶していますが、かつて和歌山市上三毛あたりにあったという御毛寺で書かれたお経です。『日本霊異記』という説話集にも出てくるこの寺が、実在であったことを物語ります。また、奈良時代に、地方でも独自に写経活動が行われていたことが分かります。南北朝～室町時代ごろに、小川八幡神社へ移されたようです。

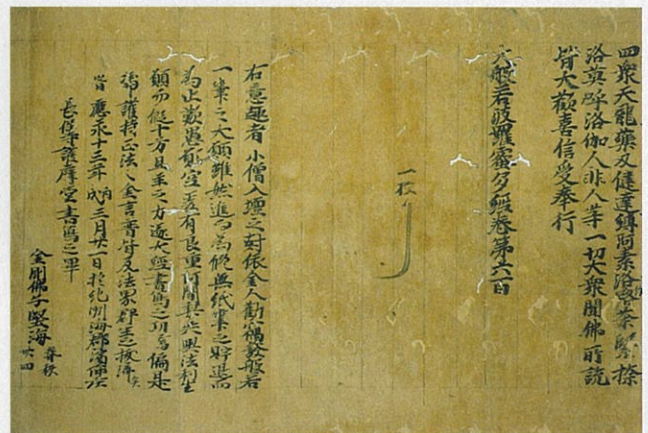
〔大般若経 巻438（紀美野町・小川八幡神社蔵）
奈良時代（展示番号1）〕



②一人で書写した大般若経

480万字以上にも及ぶ大般若経600巻を、書き写すことは大変なので、普通は何人かで手分けして行いますが、中には一人で書写することがありました。長保寺に伝わる大般若経は、堅海という僧が7年かけて一人で書写したものです。奥書には、経済的にサポートしてくれた人びとへの感謝も表しています。

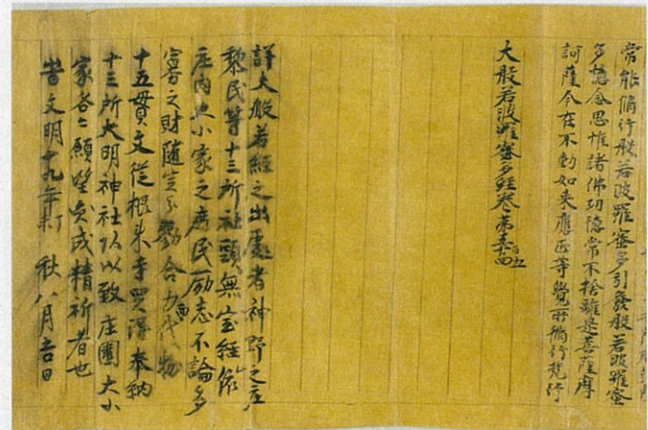
〔大般若経 巻600（海南市・長保寺蔵）
室町時代（展示番号4）〕



③村人みんなで手に入れた大般若経

大般若経は、さまざまなトラブルを取りのぞくはたらきがあると信じられていたので、村にとってはどうしても手に入れたいお経でした。神野市場の満福寺に伝わるお経は、もとは水間寺（大阪府貝塚市）などで書写されたもので、根来寺（岩出市）から購入して十三神社（紀美野町）に奉納されました。財産の多少に応じて、村人がお金を出し合って購入したことが室町時代の奥書に書かれています。

〔大般若経 巻554（紀美野町・満福寺蔵）
平安時代（展示番号14）〕



*同じ写経でも、書写された時代によって書風が変わります。これも鑑賞のポイントです。